

○名和氏系圖

○名和行秋

又稱村上氏、村上天皇皇子、具平親王之裔也、承久之役勤王、禦賊兵于宇治、

行高

長田小太郎入道、承久之役、從祖父、屬官軍、事敗奪邑、

長年

從四位下、長田又太郎、初名長高、後醍醐天皇逃隱岐、幸名和港、乃奉詔、從御船上山、遂扈乘、死於京師、

長重

稱小平太郎左衛門、勅使初到、名和、首決奉迎策、親負帝登船上山、賊來攻、乘雷雨、疾擊、擠賊于谷、斃千餘人、山陰、山陽豪族來屬數十姓、

長生

稱太郎左衛門、足利義詮犯勇山行宮、車駕衝圍還、賀名生、事急、委神鏡櫃于途、長生乃負櫃而走、賊兵追射如雨、僅免而還、

氏高

竹萬七郎入道、初船上山兵未屬、以松烟、布、盡近國將士旗號、作擬兵、以拒賊兵、

義高

正五位上、檢非違使、左京大進、伯耆大夫判官、直武者、

基長

稱孫三郎、三郎左衛門尉、迎帝赴船上山、受父命、還火、

高光

幼名乙童丸、四郎左衛門尉、船上山之戰年十四、先衆奮戰、殺賊頗多、後叙正六位上、與父從、駕延曆寺、終戰歿、

顯興

實基長之子、叙從四位下、爲檢非違使、彈正大福、官內少輔、伯耆守、從征西將軍懷良親王、勤王、居肥後八代城、

○兒島氏系圖

○和田範長

本姓三宅、相傳天日槍之裔、居備前和田、稱和田、備後守、輔高德、舉義、後於播磨、自及死、

兒島高德

稱備後三郎、後醍醐帝西遷之時、欲奪駕、舉義不成、後奉詔陷六波羅、村上帝御、勇山、詔使、往諭、東北諸將、來援、諸將至則勇山陷、不知所終、

○土居·得能氏系圖

○河野通信

河野與兒島、同姓、世著于伊豫、承久之役、通信死、主事、其庶子分爲兩家、

土居通治

任備前守、後醍醐帝御船上山、與通言、共舉義兵、討長門探題北條時直、走之、迎謁于兵庫、尊氏犯京、伐直義于豐島河原、走之、後從皇太子守金崎城、城陷、與衆自殺、

得能通言

稱彌三郎、尊氏再犯關、與通治拒于湊川、不利、從駕于叡山、與通治拒賊有功、後從皇太子、抵鹽津、會大雪、土馬凍餒、不能戰、乃植刀於地、自貫死、

通鄉

在備前守、與彈正並勇悍善戰、奉協屋義助、爲興復之計、義助死、與大館氏明、金谷經氏等、共討賊細川賴春、戰于千町原、不利、二人與經氏衝圍走、備後、不知所終、

彈正某

諸家系圖 (名和兒島·土居·得能氏)



○新田氏系圖

○源 義家

義國 從五位下、式部大輔、坐事謫上野、

○義重 從四位下、號新田大炊助、食新田郡、

義包 新田二郎、

義房 藏人太郎、

政氏 又太郎、

基氏 太郎、

朝氏 襲邑新田、遂以為氏、旗用白、旗號中黑、

○義貞

正四位上、左中將、左兵衛督、兼播磨守、上野守護、初北條氏命圍金剛山、得護良親王令旨、東歸舉將、既而尊氏伴降、勅奉皇太子、往北國、更為經略、延元三年、攻藤島、有飛矢、中額、終自刎而死、墳墓在越前國足羽郡、明治九年、勅建祠于吉田郡三屋村、祀之、號藤島神社、

脇屋義助

稱次郎、勸義貞舉義兵、建武初、入京為武者所、駿河守護、京師大捷、尊氏西奔、以功拜右衛門佐、聽昇殿、義貞戰歿後、詣吉野、拜刑部卿、伊豫人奏請將帥、令義助往節、四國軍事、其五月病卒、墳墓在伊豫遠智郡、

義治

從五位上、左衛門佐、式部大輔、與義興等、擊尊氏于金井原、取鎌倉、正平中、與義宗起兵、不克、走、出羽、不知所終、

義隆

稱少輔、與義宗子貞方、匿信濃、宗族足利氏滿遣兵、襲之、二人脫、走入陸奥、後匿箱根山中、為人所告、賊兵來捕、乃鬪死、

義顯

稱小太郎、越前守、每從父立功於征戰間、為越後守護、天渡之戰、努力圍被、數創、帝臨慰之、後守金崎、兵士飢、不能拒賊兵、乃與尊良親王、自殺、由良里見以下士卒、悉自死、

義興

幼名德壽丸、延元二年、應北畠氏、將兵攻拔鎌倉、俱出、明年顯家戰歿、從顯信、據勇山、王師敗績、奔吉野、加冠御前、賜名授左兵衛佐、正平七年、與義宗、義治、攻鎌倉、走尊氏、號令八州、既而足利基氏囑、我叛將竹澤良衡等、誘殺于矢口渡、後世立祠祀靈、曰新田社、在武藏國荏原郡、

○義宗

兄義顯卒、立為嗣、時六歲、任武藏守、左兵衛佐、聽昇殿、與義興、義治、匿東國、以伺警隙、帝陽納義隆降、遣使乘虛誅尊氏、因授左近衛少將、乃徇東國舊故、擊尊氏于金井原、破之、後退入越後、攻取其半、正平二十三年、與義治、伐上杉憲將、不克死之、

○貞方

為相摸守、元中二年、與義隆、匿信濃浪合、潛集宗族、足利氏滿遣兵、襲之、二人脫、走陸奥、庚寅歲在鎌倉、陰糾合義故、事覺見捕、被斬于七里濱、新田氏之宗於此而絕矣、

脇屋、里見、大館、堀口、島口、羽川、桃井、山名、一井、金谷、江田、大井田、徳川、世良田、諸族皆出於新田氏、



○足利氏系圖

源 義 家

義 國 式部大夫、以事  
謫關東、居上野、

義 康

新田氏祖義重弟也、食下野足利郡、因氏焉、仕鳥羽上皇、爲北面、  
左衛門尉、陸奥守、檢非違使、稱足利陸奥判官、補藏人、聽昇殿、

義 房

稱足利判官、  
戰死于宇治、

義 清

稱矢田判官、與義長、俱爲源義仲將、  
與平氏戰水島、死之、仁木細川之祖、

義 兼

上西門院藏人、壽永二  
年死於水島之戰、

義 兼

從四位下、足利上總介、號足  
利三郎、實鎮西八郎爲朝末子、

義 氏

正四位下、號足利三  
郎、左馬頭、武藏守、

義 氏

從四位下、宮內少輔、  
右馬頭、丹後守、

賴 氏

從四位下、稱三郎、治部大輔、家  
左馬介、三河守、初號足利氏、

賴 氏

從五位下、稱太郎、式部  
丞、伊豫守、贈從三位、

賴 氏

稱太郎、從四  
位下、讚岐守、

尊 氏

北朝正二位、初名高氏、稱又太郎、權大納言、  
征夷大將軍、贈從一位、太政大臣、謚等持院、

直 義

北朝從三位、初名高國、又忠義、左兵衛督、征夷副將軍、  
削髮號惠源、號高倉殿、稱錦小路、贈從一位、

竹 若

建武二年、尊氏反、法印覺通誘殺之、  
浮島原、覺通者其舅也、號雲光院、

直 冬

從四位下、爲叔父直義  
嗣、宮內大輔、中國探題、

冬 氏

兵衛佐、居備後、  
世呼中國武衛、

義 詮

北朝正二位、幼名千壽王、大納言、征夷大將軍、  
贈從一位、左大臣、稱坊門殿、謚寶篋院、

基 氏

從三位、幼名光王丸、左兵衛督、關東管領、  
直義猶子、鎌倉殿祖也、號瑞泉寺、

義 滿

從一位、小字孫王、太政大臣、准三宮、征夷大將軍、淳和獎學兩院  
別當、源氏長者、削髮號天山道義、謚鹿苑院、明主贈恭獻王、

滿 詮

從二位、權大納言、贈從一位、  
左大臣、號養德院、

義 持

從一位、內大臣、右近衛大將、  
削髮稱道詮、謚勝定院、

義 量

參議、左中將、應永三十二  
年、先父病卒、謚長持院、

義 嗣

大納言、有異心、爲兄  
義持所殺、號林光院、

義 教

從一位、幼名義圓、爲僧止住、青蓮院、蓄髮名義宣、更義教、左大臣、  
右近衛大將、嘉吉元年六月、爲赤松滿祐所弑、贈太政大臣、謚普光院、

義 昭

爲大僧正、誂、後龜山皇子在嵯峨大覺寺、  
者舉兵事覺逃亡、爲薩摩人所斬、

法 尊

居仁和寺、  
梵光院、

諸家系圖 (足利氏)



義承 梶井門主、大僧正。

○義勝 從四位下、左近衛中將、嘉吉三年、墮馬卒、時十歲、贈從一位、諡慶雲院。

○義政 從一位、初名義成、左大臣、右近衛大將、准三宮、退居東山、起銀閣、以擬義滿金閣、稱東山殿、贈太政大臣、諡慈昭院。

○義尙 從一位、內大臣、右近衛大將、晚更義熙、延德元年、薨于近江鈎里陣中、諡常德院。

義觀 居聖護院、稱聖護院門跡、應永二十二年還俗。

義視 正三位、初名義尋、權大納言、號今出川殿、削髮為淨土寺門主、號大智院、贈太政大臣、從一位。

○義植 從二位、初名義材、又義尹、義政養子、權大納言、大永元年、為細川高國所逼、走淡路、後二歲薨、諡惠林院。

政知 從三位、左兵衛督、初為香嚴院主、蓄髮管領于關東、居伊豆堀越、改名氏滿、號堀越御所、為子茶丸所弑、號幢勝院。

童形 茶丸為繼母所讒、幽囚數年、憤怨遂弑繼母、弑父自立、竟為伊勢長氏所殺。

○義澄 從三位、初名義通、更名義高、亦義政養子、參議、左馬頭、永正七年薨于近江嶽山、贈從一位、太政大臣、諡法性院。

○義晴 從三位、權大納言、右近衛大將、天文十九年五月、薨于穴太山中、贈左大臣、從一位、諡高松院。

義維 稱源冠者、左馬頭、為義植所子養、稱無覺寺殿。

○義輝 從四位、參議、左中將、征夷大將軍、初名義麟、永祿八年、為三好三當所殺、贈左大臣、從一位、諡光源院。

○義昭 從三位、初名覺慶、為南都一乘院主、永祿十一年、拜征夷大將軍、權大納言、晚依毛利氏、居輅津、慶長二年卒、贈准三宮、諡靈陽院。

周嵩 居鹿苑寺、為賊平田和泉守某所誘殺、諡照山西堂。

義榮 倚三好三黨、冀望為將軍、任左馬頭、患癩卒、征夷將軍、諡光德院。

義助 阿川那東郡平島莊居、住、號大龍院寶山。

(以上—京都將軍)

○氏滿 從三位、小字金王丸、左馬頭、左兵衛督、關東管領、應永五年逝去、號永安寺。

○持氏 從三位、左馬權頭、左兵衛督、關東管領、永享十一年與上杉憲實戰、自殺于永樂寺、號長春院。

○滿兼 從四位下、左兵衛佐、關東管領、稱勝光院、世呼其家、號鎌倉御所。

持仲 足利二弟、與叔父滿隆、俱自殺于雪下僧舍。

滿直 左兵衛佐、稱稻村殿、同姪持氏、自殺。

義久 幼名天皇丸、又賢王丸、與父同自殺。

滿高 稱新御堂、應永二十四年、與姪持氏戰敗、同姪持仲、自殺于雪下僧舍。

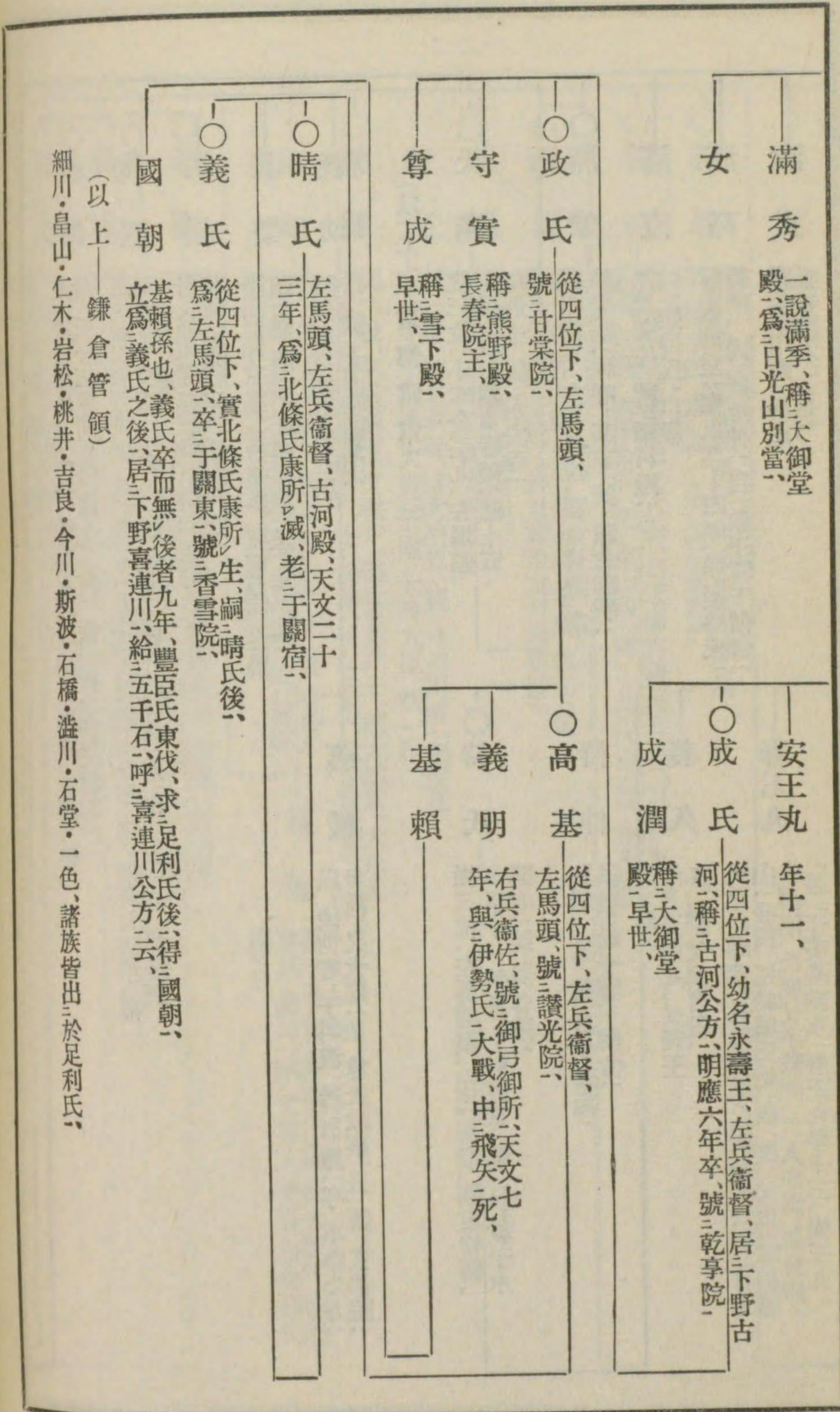
滿貞 稱篠川殿、同持氏及義久、自殺。

春王丸 父之亡時、為乳母長尾氏所擊、遁走日光山、後投托結城氏朝、欲復父仇、尋結城古河陷、氏朝父子戰死、二人亦為善教所殺、于美濃垂水、春王丸年十三、安王丸

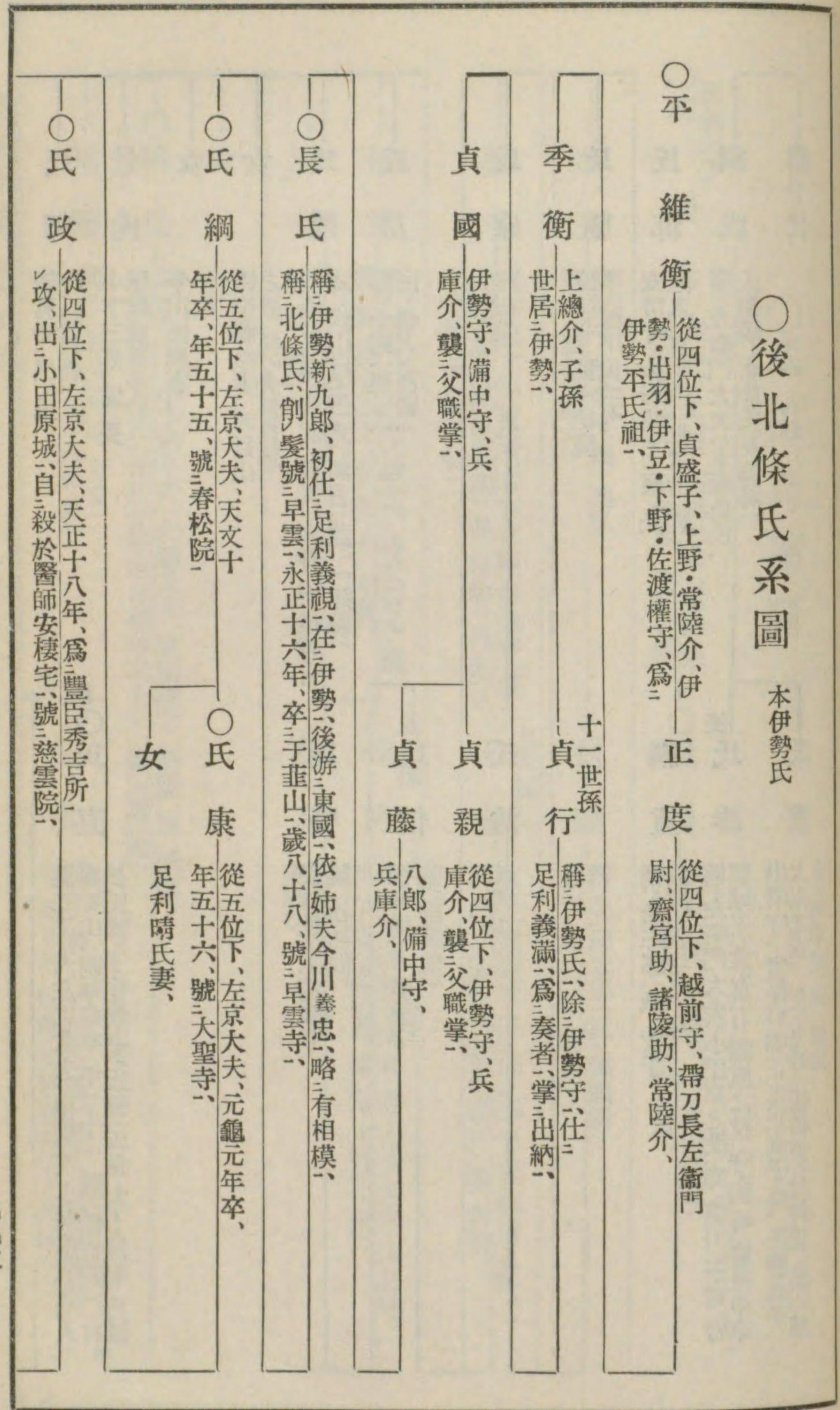
諸家系圖 (足利氏)

九九三



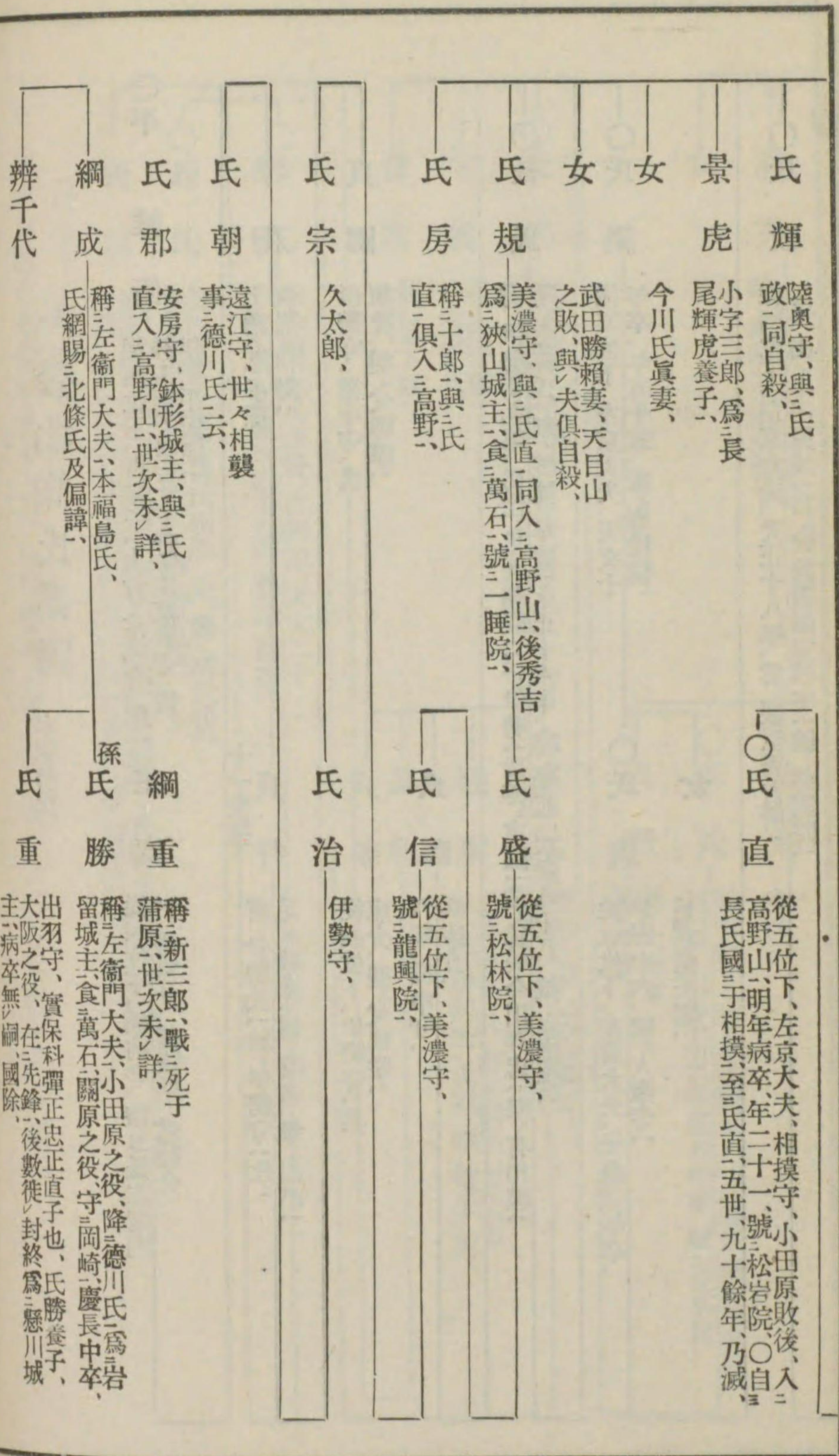


○後北條氏系圖 本伊勢氏

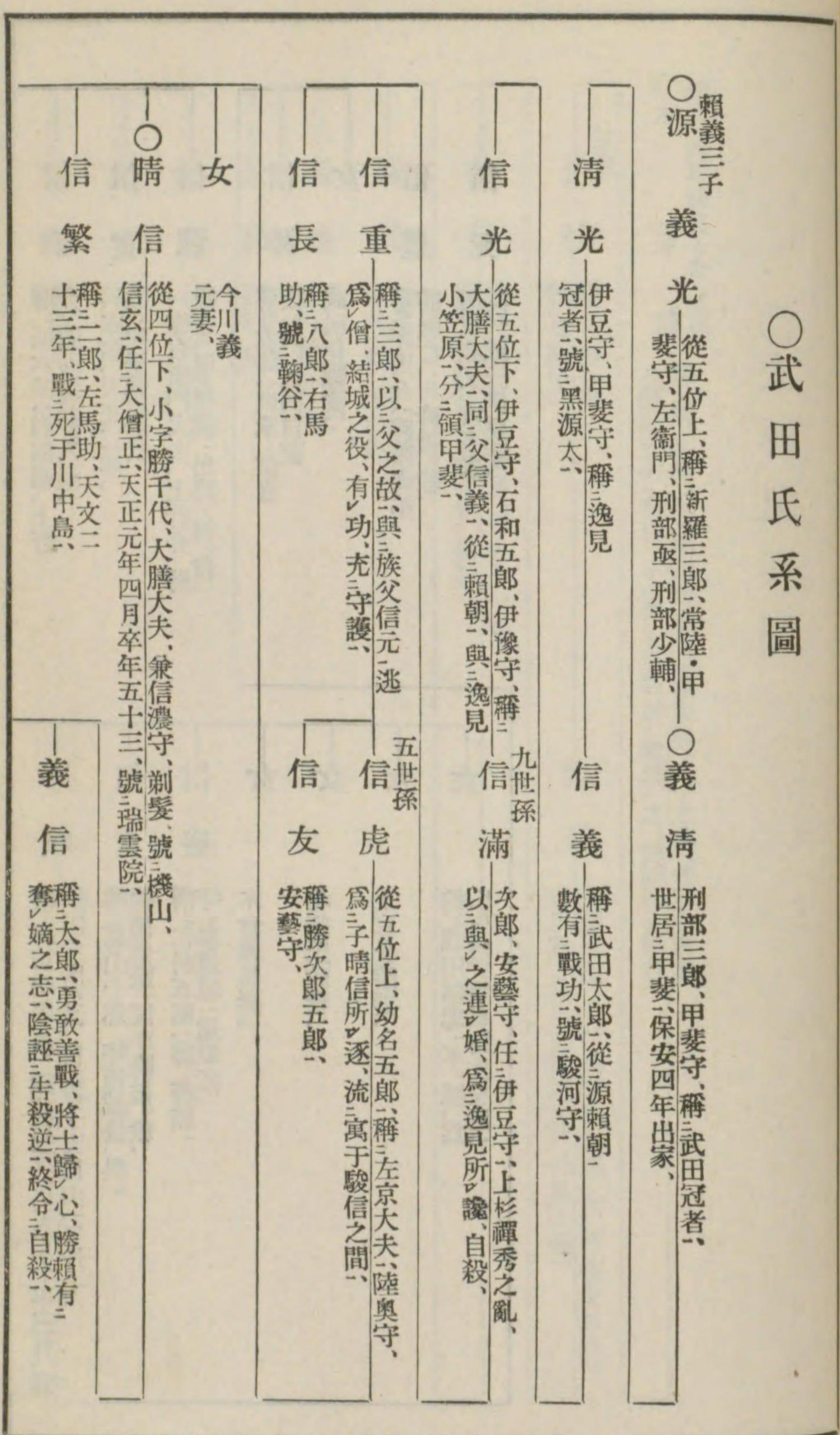


諸家系圖 (後北條氏)

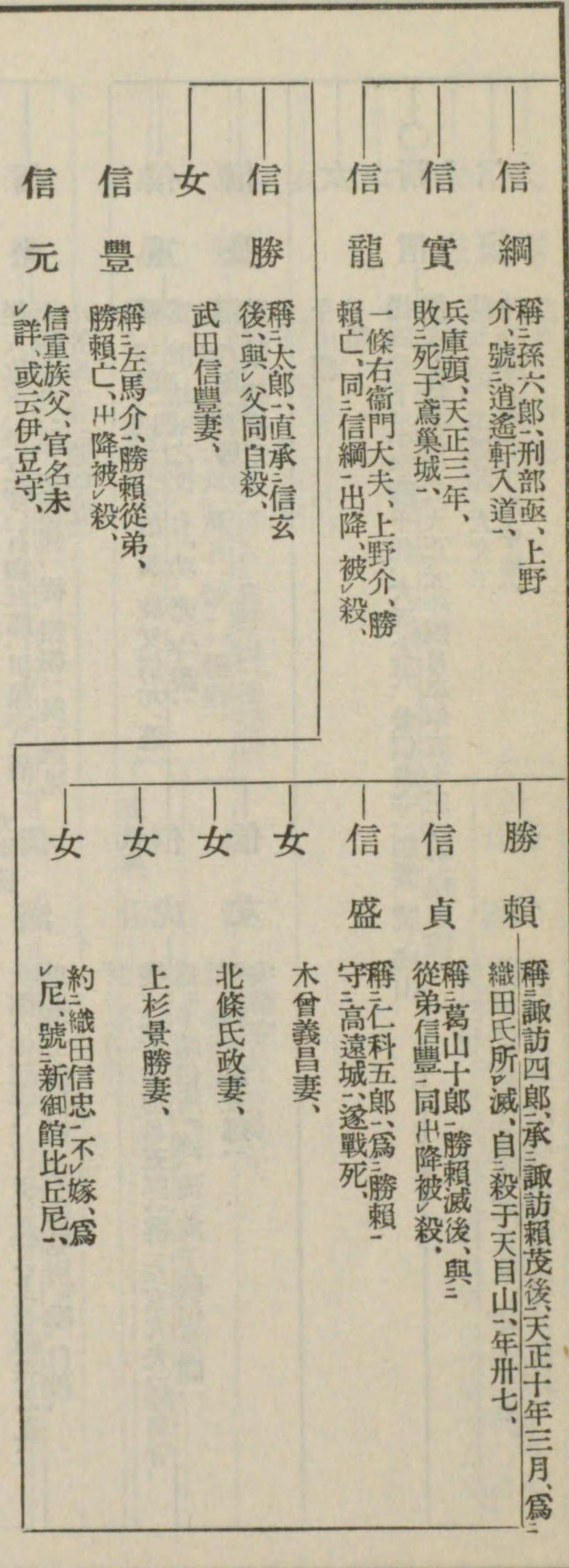




○武田氏系圖







○上杉氏系圖

鎮守將軍良文十世之孫

○平景政 稱權五郎、居相模鎌倉、源義家後三年之役、爲鳥海彌三郎所射、右目不拔、其箭射敵殺之、靈祠在鎌倉、

五世 弘 稱二郎、始號長尾氏、

藤景 本藤原氏、上杉重房庶曾孫、食丹波上杉邑、因氏焉、長尾氏嗣絕、爲長尾氏嗣、

爲景 稱六郎、爲信濃守、天文十一年、爲一向賊將江波某所誘殺、

晴景 天文十六年、與輝虎戰、敗自殺、

景康 爲權臣胎田、黑田等被殺、

景房 與景康同被殺、

女 上杉定實室、

女 畠山義則室、

女 長尾政景室、

諸家系圖 (上杉氏)



○輝 虎 從五位下，小字虎千代，更名景虎，與上杉憲政約為父子，因冒上杉氏，又受其識號，削髮號不識院心光，謙信、權大僧都，禪正少弼，將軍義輝，賜偏諱，改今名，天正六年三月卒，年四十九。

景 虎 稱三郎，實北條氏康子，天正七年，為景勝及武田勝賴所攻，自殺。

○景 勝 從三位，稱喜平次，會津中納言，參議，實長尾越前守政景子，元和九年卒。

定 勝 四位少將，彈正大弼。

綱 勝 播磨守，侍從。

綱 憲 彈正大弼，實吉良上野介義英子，於綱勝為外甥。

義 春 畠山義則弟，謙信子，養之，後復畠山氏。

俊 景 稱平六，三條城主於橡尾城，為謙信所斬。

藤 景 稱帶刀，為謙信所誅。

謙 忠 稱小平次，彈正忠入道，於厩橋為謙信所斬。

○毛利氏系圖 本姓土師宿禰

○野 見 宿 天德日命十四世 垂仁天皇七年，與蹶速相撲斃之，三十二年皇后崩，埴埴以造軍馬人物等形，代殉死，因賜姓曰士部臣。

後裔 本 主 備中介，平城天皇皇子出於阿保親王。

音 人 從三位，左大辨，賜姓大枝氏，後更大江，母中臣氏，阿保親王侍女。

千 古 從四位上，伊豫權守，式部權大輔，或云中納言。

七世孫 匡 房 正二位，權中納言，兼大宰權帥，大藏卿，世稱江帥。

曾孫 廣 元 正四位下，大膳大夫，兼陸奥守，佐賴朝，稱天下，為幕府元老，削髮號覺阿，嘉祿元年卒，年八十三，墳墓在鎌倉。

親 廣 從五位下，右近衛將監，民部少輔，武藏守，號蓮阿，承久之役，為官軍，不知所終。

秀 嚴 前因幡守。

○季 光 從五位下，左近衛將監，藏人，安藝守，號西阿，為評定衆，食相摸毛利莊，因氏焉，娶三浦氏，死其難，一作秀光。

經 光 左近衛將監，居越後南莊。

時 親 稱修理亮，為六波羅評定衆。

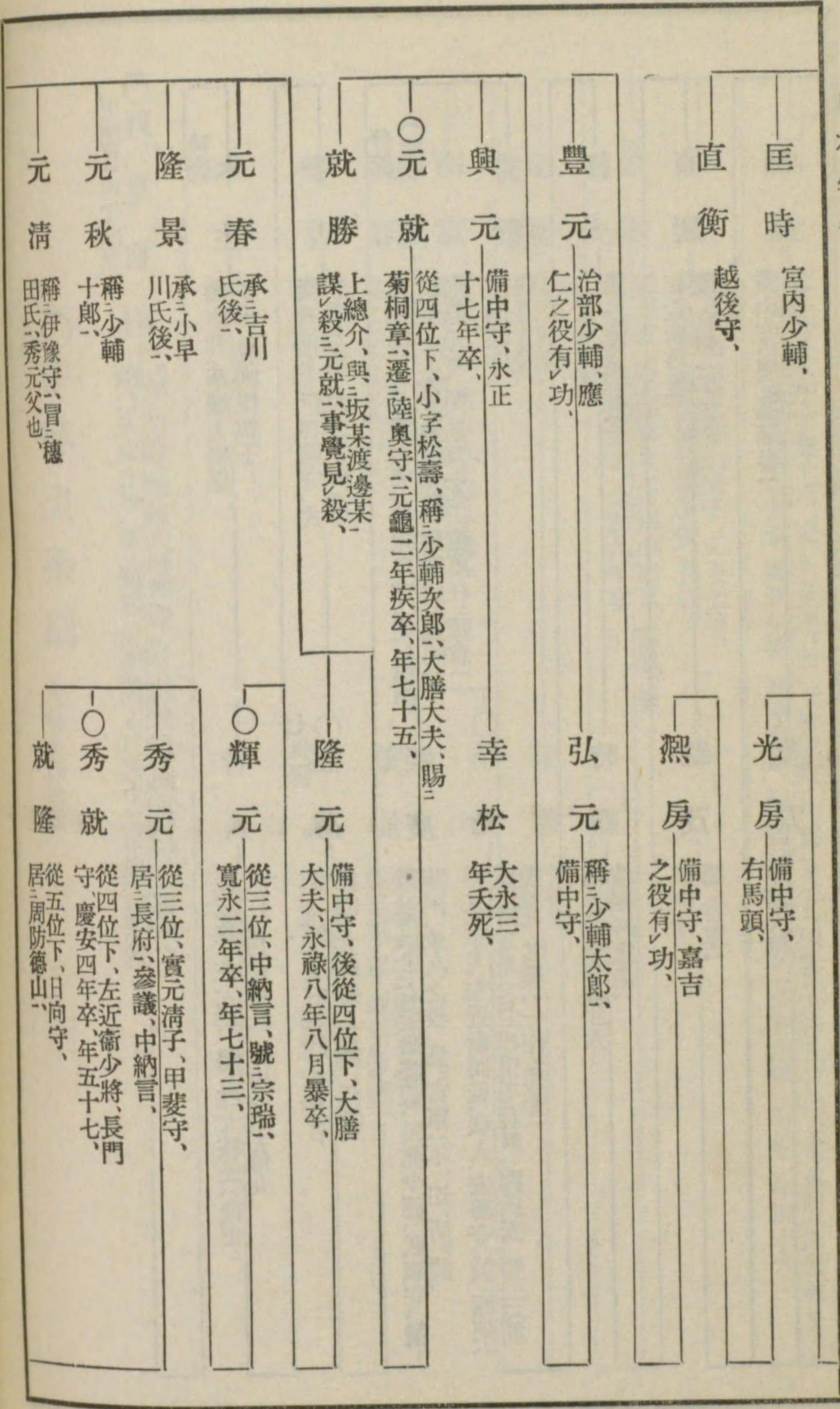
貞 親 左近衛將監，屬官軍。

親 茂 備中守，屬官軍。

師 親 備中守，屬高師泰，後屬山名氏。

廣 房 中務大輔。

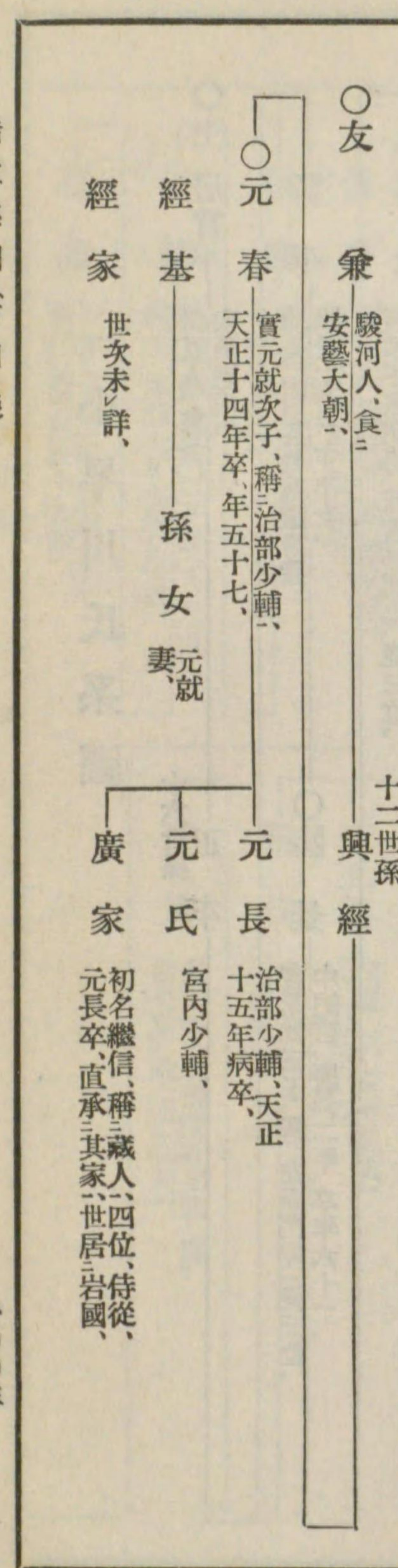




元政 稱小輔七郎, 讚岐守, 大藏大輔  
 元康 質於豐臣氏  
 元綱 稱慶四郎, 四位侍從, 治來目, 穴戶隆家妻  
 秀包  
 女

元知 從五位下, 刑部少輔, 居長門清末, 秀元次子也  
 森高政 豐臣氏質子也, 伊勢守, 森與毛利國音相近, 遂冒毛利氏, 居豐後佐伯

○吉川氏系圖



諸家系圖(吉川氏)



○小早川氏系圖

○土居實平 伊豆人、食安藝豐田、

十六世孫 正平

繁平 幼失明、其族黨議請養、隆景、妻以正平女、

○隆景 實元就三子、稱左衛門佐、從三位、中納言、慶長二年、卒年六十二、

○秀秋 實木下家定男、秀吉外甥也、從三位、中納言、食備前、美作、卒無嗣、國除、

○織田氏系圖

○平重盛 正二位、內大臣、世稱小松大臣、治承三年、患瘍而薨、

資盛 正二位、右近衛權中將、越前守、壇浦之敗、投海而死、

○親眞 稱三郎權大夫、越前織田元祖、元曆中、平氏舉族死、亡于西海、母懷之、匿于近江津田鄉長家、後見養、於越前織田莊祝人、子孫事斯波義重、徙于尾張、

十五世孫 敏定 稱三郎、伊勢守、事斯波義敏、居于尾張犬山城、

敏信 左馬助、伊勢守、

信定 稱彈正忠、

常祐 因幡守、天文十六年、攻齋藤秀龍于稻葉山、戰死、

信秀 彈正忠、備後守、居勝幡城、天文廿年、患瘵而卒、

彥五郎 信豐、弑斯波義敏、為信長所殺、

信康 稱與二郎、戰死於伊奈波山、

信安 伊勢守、居岩村城、

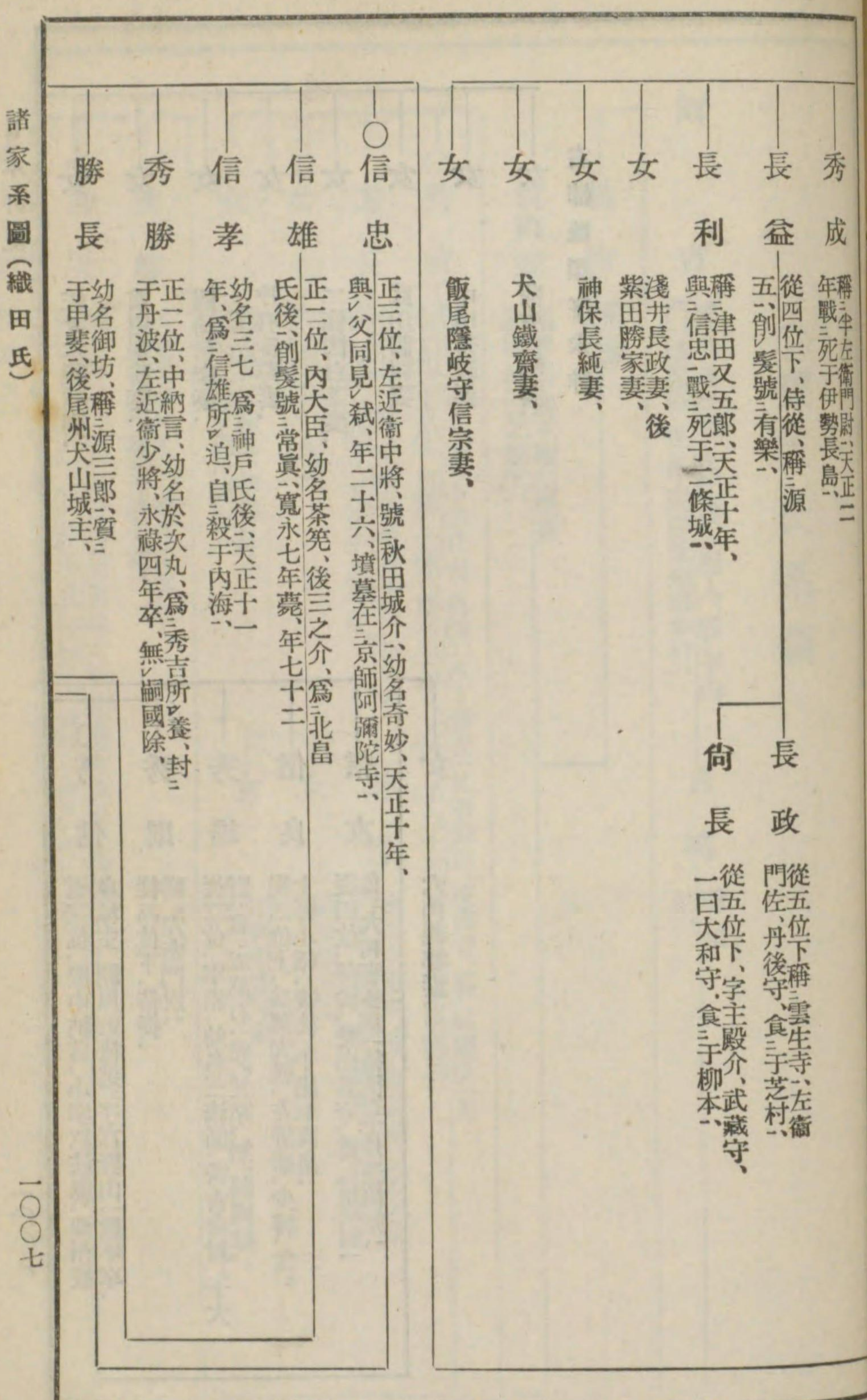
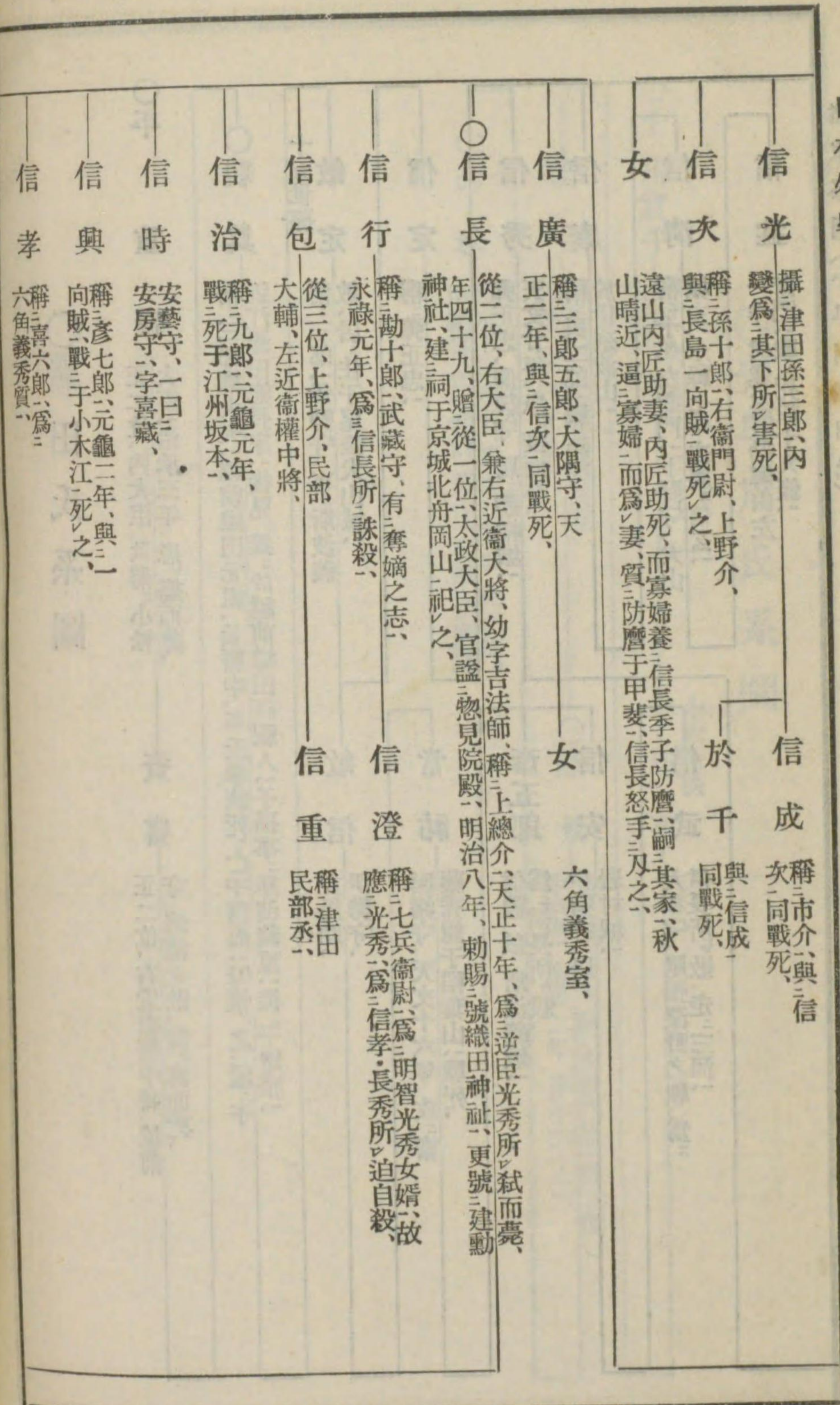
信清 稱十郎左衛門、下野守、犬山城主、永祿七年去屬信玄、

信武 大和守、尾張深野之戰、為信長所敗、走三河、

信益 一作信業、稱勳、解由左衛門、戰死於十九條、

諸家系圖(小早川・織田氏)





諸家系圖(織田氏)



女 佐々木義秀妻、  
 女 前田利勝妻、  
 女 岡崎信康妻、  
 女 丹羽長秀妻、  
 女 二條關白某妻、  
 女 武田勝頼妻、  
 女 中川秀政妻、  
 女 蒲生氏郷妻、  
 右姉妹順序未詳

○秀 信 正三位、權中納言、小字三法師、濃州岐  
 阜城主、關原敗後逃于高野山、數年卒、  
 秀 則 從四位下、侍從、  
 秀 雄 從三位、宰相、幼名三法師、秀吉命封于大  
 野、食五萬石、先父卒、無嗣、國除、  
 信 良 從四位上、兵部大輔、左近衛、少將、食  
 上野小幡、後徙于出羽高島、  
 信 友 從四位、侍從、兼出雲守、爲信雄嗣、  
 食大和宇多郡、後徙于丹波柏原、  
 女 六角義郷妻、

○豐臣氏系圖

國 吉 號昌盛法師、近江淺井郡人、居于山  
 門、後還俗、住于尾張愛知郡中村、 吉 高 稱彌  
 助、

昌 吉 稱彌

筑阿彌 同昌人、國主織田信秀  
 之僕、秀吉之繼父、

○秀 吉 關白、太政大臣、小字日吉、自稱木下藤吉、又羽柴氏、筑前守、賜姓豐臣、天  
 正十九年致仕、自稱太閤、慶長三年八月薨、年六十三、詔賜號豐國明神、

秀 長 小字小一郎、實秀次弟、秀吉異父弟也、  
 稱大和納言、天正十九年卒、 秀 俊 實秀次弟也、爲秀長嗣、任大納  
 言、投蜻蛉瀑、死、無嗣、國除、  
 三依法印一路妻、 森美作守室、  
 秀次母、

女 秀吉異父妹也、初適佐治  
 日向、後嫁德川家康、 女 毛利甲斐守室、

女 實織田右府之子、秀吉養爲子、  
 封于丹波、稱丹波少將、

○秀 勝 實織田右府之子、秀吉養爲子、  
 封于丹波、稱丹波少將、

○秀 次 叙正二位、任關白、實秀吉妹子也、始稱三好某、爲豐臣  
 氏嗣、文祿四年、有罪見放、高野山、廢爲庶人、令自殺、

諸家系圖(豐臣氏)



秀秋 稱金吾中納言、秀吉夫人淺野氏之兄、木下家定子也、秀吉養爲子、出爲小早川隆景嗣、

鶴松 姬人淺井氏出、天正十九年夭、

○秀賴 從一位、右大臣、幼名棄丸、元和元年、大阪城陷、與生母淀君自盡、年二十三、豐臣氏滅、

國松 甫八歲、見捕斬于六條磧、

女 見捕斬、

仙千代丸

四兒與姬妾三

百丸

十餘人、破斬于二條磧、

十一丸

十九丸

○德川氏系圖

○清和天皇

孫 源經基 稱六孫王、始賜姓源朝臣、

玄孫 義家 八幡公、

義國 謫居上野、食新田・足利諸邑、新田・足利二氏之祖、

○義重 式部大輔、氏新田、守寺尾城、贈從四位下、鎮守府將軍、

義康 判官、氏足利、與義重共助賴朝討滅平氏、

四子 義季 食德川邑、因氏焉、稱四郎、

賴氏 稱彌四郎、從五位下、參河守、食世良田、因又號世良田氏、

教氏 稱二郎、

家持 稱又二郎、

滿義 稱孫二郎、

政義 稱太郎、右京亮、

親季 修理亮、助新田義貞、討滅北條氏于鎌倉、

諸家系圖(德川氏)



有親 右京亮、從新田貞方起兵陸奥、不克而逃、從曾尊觀、懼為其徒弟、削髮呼德阿彌、携二子過參河、寓大濱村寺、

親氏 初呼長阿彌、從父過參河、著髮稱雅樂助、 廣親 稱五郎、是為酒井氏、

○泰親 初呼德壽、亦從父過參河、養於松平信重、稱太郎、左衛門、後從五位下、參河守、復世良田氏、諡良祥、

信廣 稱太郎、左衛門、居松平村、

○信光 幼字次郎三郎、稱和泉守、居岡崎、子孫蕃衍生男女四十餘人、諡崇岳、

親忠 幼字竹千代、稱藏人、居岩津、諡松安、

親長 稱太郎、修理亮、守岩津、

乘元 稱源太郎、加賀守、守大給、

○長親 為嗣稱藏人、除出雲守、居安祥、諡棹舟、

親房 玄蕃允、

○信忠 左京亮、居安祥、大永三年、年老、大濱、諡安栖、

親盛 稱福釜三郎、次郎、右京亮、

倂超譽 智恩院主、

親光 刑部丞、

長家 安祥左馬助、

長忠 右京亮、

乘清 加賀右衛門、又稱源二郎、

信定 稱與一郎、又櫻井內膳正、  
利長 稱藤井彥四郎、又勘解由左衛門、  
義春 稱甚太郎、又東條右京亮、

○清康 小字次郎三郎、居岡崎、國人稱岡崎公、天文二年十二月、為國老安倍信定之子彌七所弑、諡善德、

信孝 稱三木內藏允、

康孝 稱鶉殿十郎三郎、

○廣忠 稱二郎三郎、任參河守、天文十八年卒、年二十四、贈正二位、大納言、諡瑞雲、

僧成譽 大樹寺主、

女 酒井忠次妻、

○家康 第一世 征夷大將軍、從一位、右大臣兼淳和學兩院別當、源氏長者、辭職後任太政大臣、幼字竹千代、天文十一年十二月生、長稱二郎三郎、名元信、更元康、稱藏人、奏請復德川氏、以松平為族、元和二年四月薨、年七十五、葬久能山、三年改葬日光山、詔贈正一位、賜號東照宮、稱神祖、



女	奧平美作守 信昌室
信康	稱岡崎三郎、天正七年九月、 自殺于二股、年二十一、
秀康	拜參議、從三位、權中納言、封越前、幼名菘丸、初爲豐 臣氏養子、後復爲結城結城晴朝嗣、慶長十二年卒、
忠直	從三位、參議、幼字長吉丸、有罪流豐後、 削髮號一伯、徙封其子光長、越後、
忠昌	正四位下、幼字虎之助、 參議、封越前、
直正	正四位、左少將、 封出雲、居松江、
直基	從四位下、侍從、大和守、 繼結城氏、居河越、
直良	從四位、侍從、但 馬守、居明石、
○二世 秀忠	正二位、內大臣、征夷大將軍辭職後、叙從一位、任太政大臣、幼字長 丸、天正七年生、寬永九年薨、年五十四、贈從一位大相國、諡台德、
忠吉	三位、中將、嗣東條松平氏、稱 清須薩摩守、慶長十二年卒、無嗣、
信吉	稱五郎、嗣穴山氏、又 稱武田萬千代丸、
女	北條相模守 氏直室

女	蒲生飛騨守秀行室、 後淺野但馬守長晟室、
忠輝	四位、少將、稱上總介、封越前、後 有罪放伊勢、後遷信濃、卒、
義直	從三位、權大納言、 參議、封尾張、
賴宣	從三位、權大納言、 參議、封紀伊、
賴房	正三位、權中納言、 右近衛少將、封水戶、
女	豐臣右大臣 秀賴室
女	前田中納言 利光室、改利常、
女	越前參議 忠直室
女	京極若狹守 忠高室
○三世 家光	慶長九年生、幼字竹千代、從一位、左大臣、左近衛大將、征夷 大將軍、慶安五年薨、年四十六、贈官位如前代、諡大猷、
忠長	從二位、大納言、稱駿河大納言、幼字 國松、有罪、寬永十年、自殺于高崎、
女	諱和子、寬永十年入宮、爲後水尾 天皇女御、後進中宮、號東福門院、
光圀	從三位、 中納言、
光友	從二位、 大納言、
光貞	從二位、 大納言、



正之 正四位下、中將、肥後守、幼字幸松丸、爲保封、會津、科正光嗣、

女 尾張大納言光友室、

○四世家 綱 寬永十八年生、慶安四年紹將軍職、在職三十一年、延寶八年薨、年四十、諡嚴有、

綱重 從三位、參議、封于甲斐、稱甲斐宰相、

女 松平筑前守光高室、

○五世綱 吉 中將、寬文九年封館林、天和元年入襲將軍職、在職二十九年、寬永六年薨、年六十四、諡常憲、

女 紀伊中納言綱教室、

○六世家 宣 實綱重長子、延寶六年襲封、寶永六年、爲綱吉義子、六年紹軍職、在職四年、正德三年薨、年五十一、諡文昭、

○七世家 繼 幼字鍋松、寶水六年生、正德二年襲職、在職四年、享保元年薨、僅八歲、諡有章、

○八世吉 宗 實賴宣孫也、享保元年、自紀伊入襲職、在職三十年、辭職後六年、寶永元年薨、年六十八、諡有德、

○九世家 重 幼字長福、延享二年襲職、在職十七年、寶曆十一年薨、年五十一、諡悼信、

宗武 從三位、中納言、右衛門督、稱田安、

宗尹 從三位、參論、刑部卿、稱一橋、

治濟 參議、

○十世家 治 幼字竹千代、寶曆十一年襲職、在職二十五年、天明六年薨、年五十二、諡浚明、

重好 從三位、中納言、宮內卿、稱清水、

○十一世家 齊 幼字豐千代、實一橋治濟子、於吉宗爲曾孫、家治無嗣、天明元年入爲世子、七年襲職、累遷左大臣、終拜從一位太政大臣、在職五十一年、辭職後四年、天保十二年薨、源氏足利氏以來、在軍職兼太政大臣者、獨公而已、諡文恭、公生二十八男二十九女、略之、

○十二世家 慶 從一位、內大臣、在職十七年、寬永六年薨、家定紹職、諡慎德、

○十三世家 定 從一位、內大臣、初名家祥、稱政之助、安政元年三月六日薨去、歲三十五、諡溫恭、追贈從一位太政大臣、時外事急迫、不發喪、及三旬、

○十四世家 茂 從一位、近衛大將、右馬寮御監初名慶福、元治二年八月十一日、薨于大阪、歲二十一、諡昭德、自紀州家入繼宗家、

○十五世慶 喜 水戶齊昭子、初承一橋家、後入繼宗家、慶應三年十月、奉還征夷職、告老、讓家于嗣龜之助、後別爲一家、敘公爵、

家達 初名龜之助、自田安家入、爲慶喜嗣、



慶久 及慶喜、別立、三家爲其嗣

諸家系圖終

日本外史解義後記

註釋の事業は極めて至難である。原義を失はないやうにせねばならぬことは勿論、原文の持つてゐる味や香を註釋してゆく間に、自ら他人に傳へることが最も大切であるからである。而して又これが註釋者の大に意を留めねばならぬ所である。私が日本外史の註釋を委囑せられたのは既に數年前のことであつたが、こんな至難な業は到底出來さうもないし、又それが高祖父の著述であるのと、全部で二十二卷といふ大部なものであるのとで、聊か躊躇する所があつた。併し弘道館の懇望否み難く、遂に一昨年來公務の餘暇を偷んでは之に著手してゐたのである。

從來日本外史の註釋書や語釋書の類の流布せられてゐることは、卷頭掲ぐる所の參考書目に由つて觀ても之を知り得るので、著者が此の稿を終へた後、蒐集したものだけでも猶ほ十種以上にも上るであらう程である。皆良書するには違ひないが、併し漢文の稍



流行した時代に發行せられたものであるから、此等註釋書は現代人には讀んでも少々ごちない氣がして、讀むうち自然倦怠を生せしめる恐れがある。そこでづつと碎けて最も通俗的な解釋を施して見ようと企てたのがこの新釋である。だから自體言葉に冗があるし、言ひ廻しに俗な所があつても、それは致方ないのである。如上の見地から試みたのであるから、その點を知れば讀者諸賢も大に之を諒恕せらるゝことゝ思ふのである。たゞ菲才、其の任でないが爲めに、原文の味や香を那邊まで傳へ得たか頗る疑問であつて、この點誠に愧怍ならざるを得ない所又本文の句讀點、返點、送假名の如きは、多く現今漢文教科書に用ひられてゐる法に準據して附したのであつて、可成り苦勞をした。併しこれとて魯魚の誤のあることは到底免れぬ。これは後日再機を得た時に改訂するつもりである。

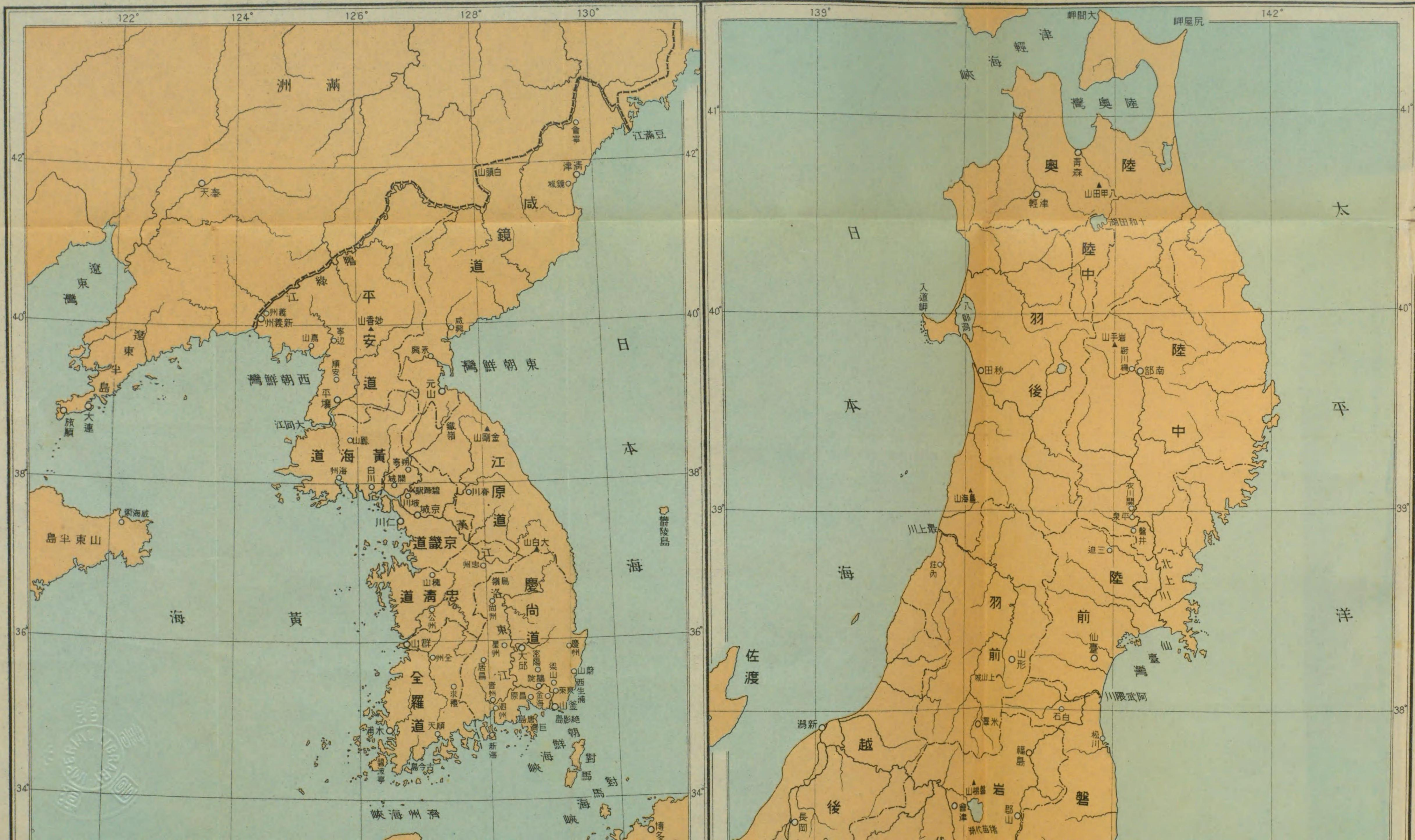
昭和辛未七月朔

著者識す





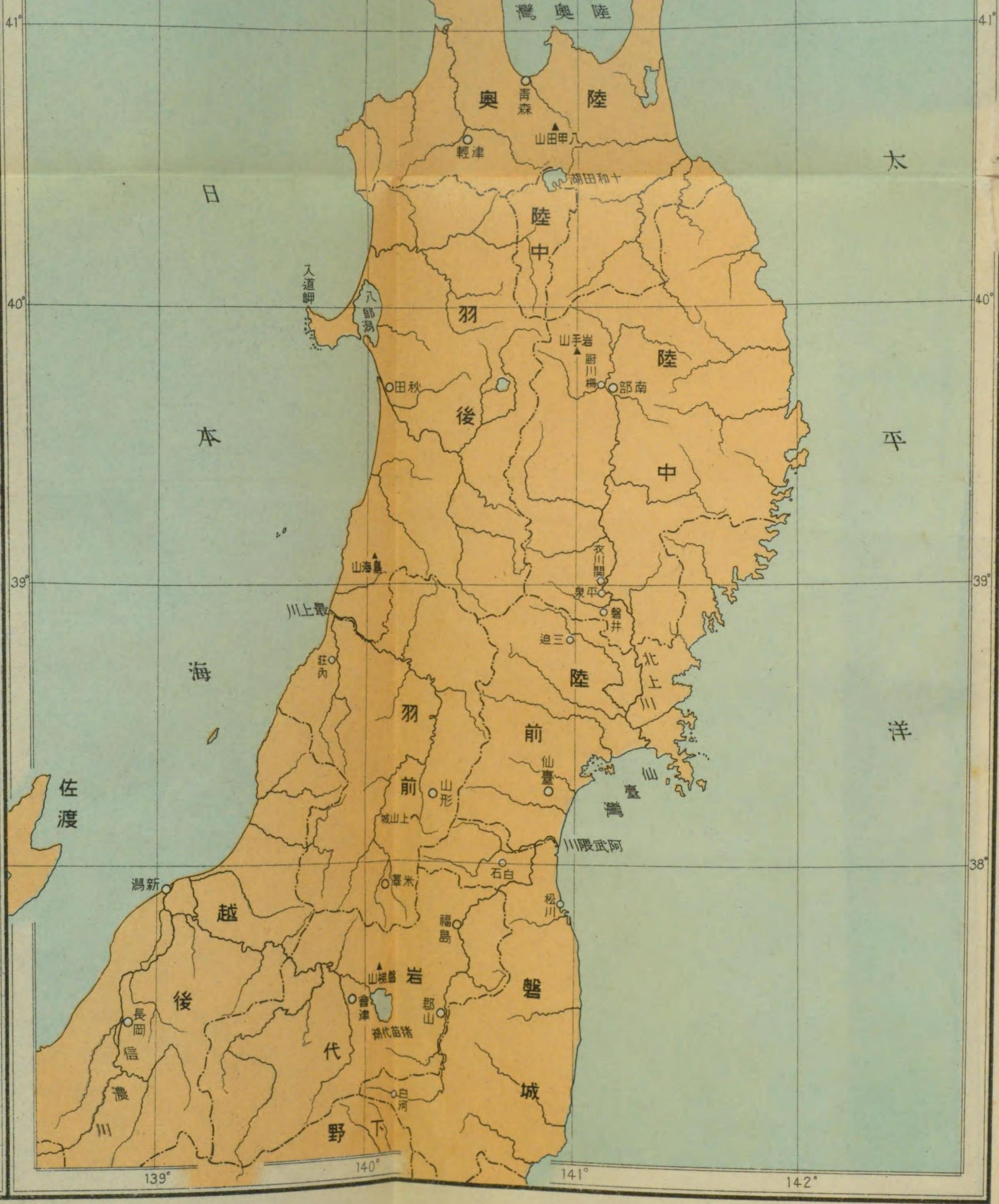
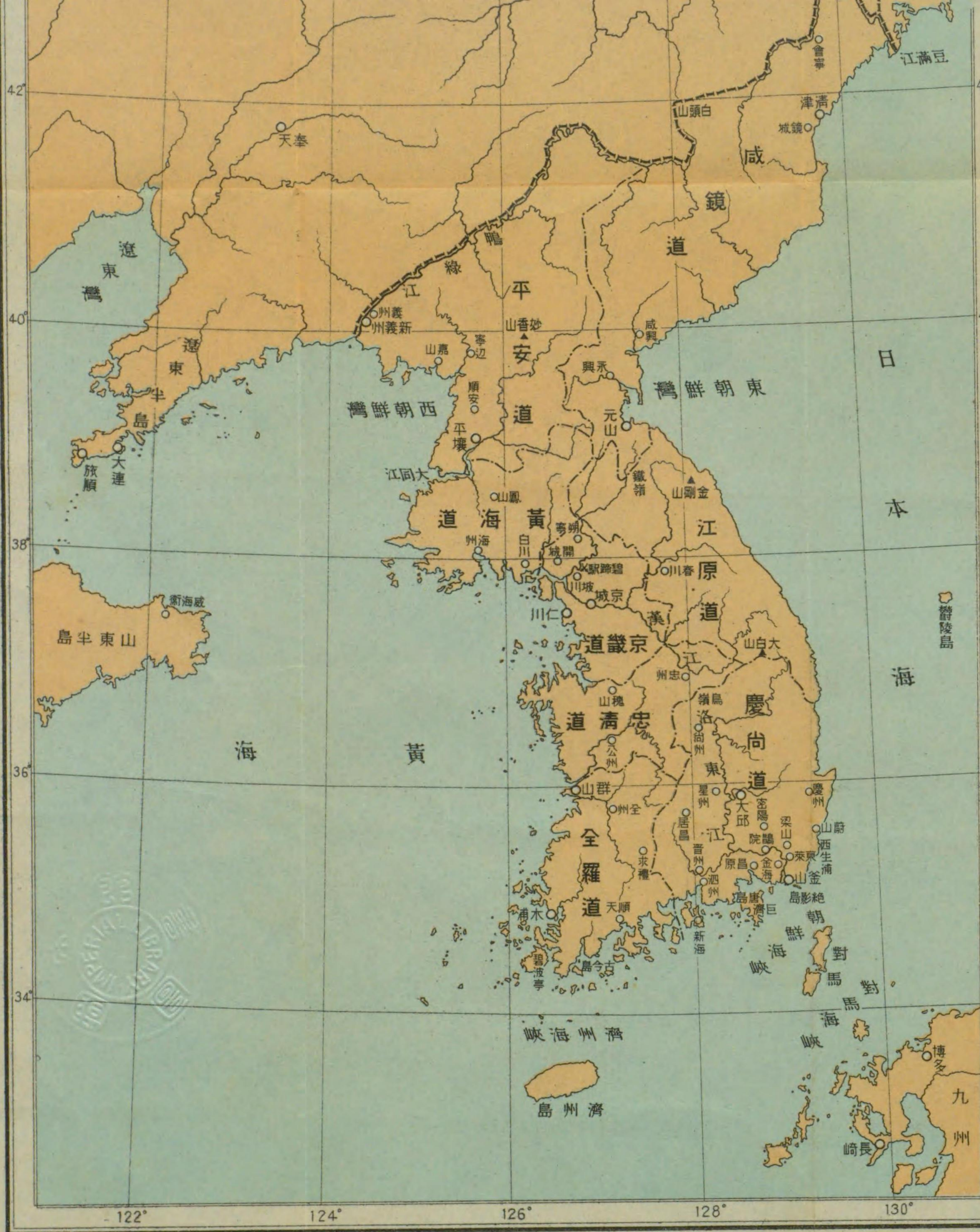
日本外史附圖



昭和辛未七月朔

著者識



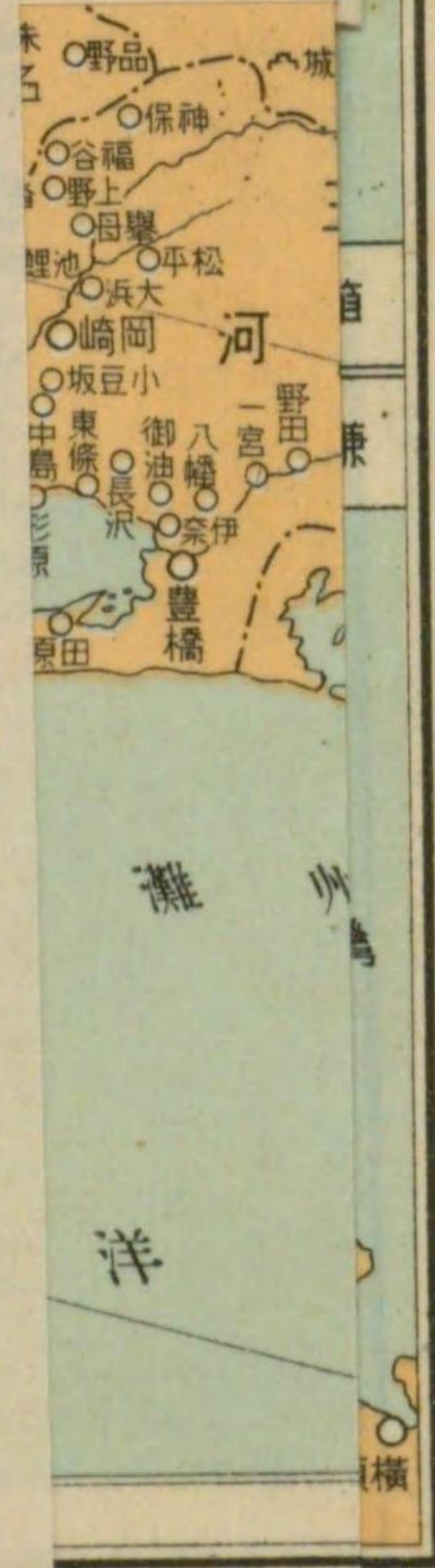


昭和辛未七月朔

著者識す



53





日本外史附圖

38° 137° 138° 139° 140° 141°

京都及大阪地方



箱根及伊豆地方

鎌倉地方

38

35

34





方地豆伊及根箱

方地倉鎌

38

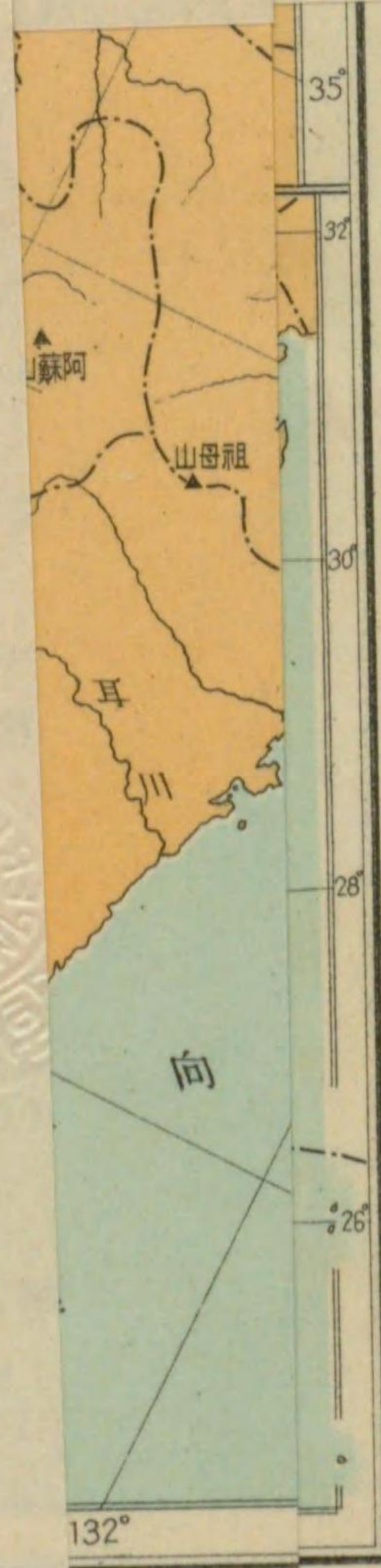
35

34

135° 136° 137° 138° 139° 140°



53





日本外史附圖



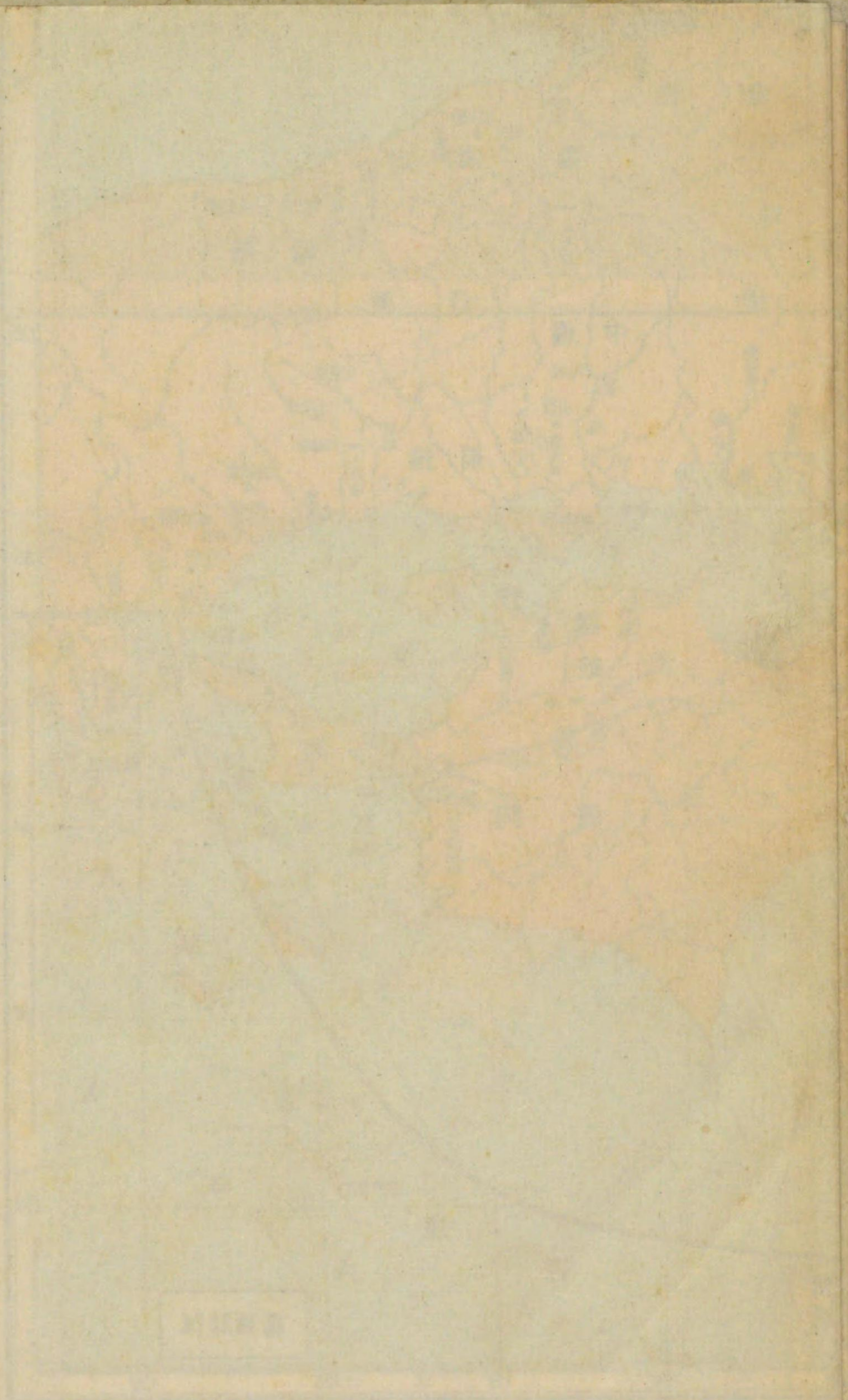




琉球諸島



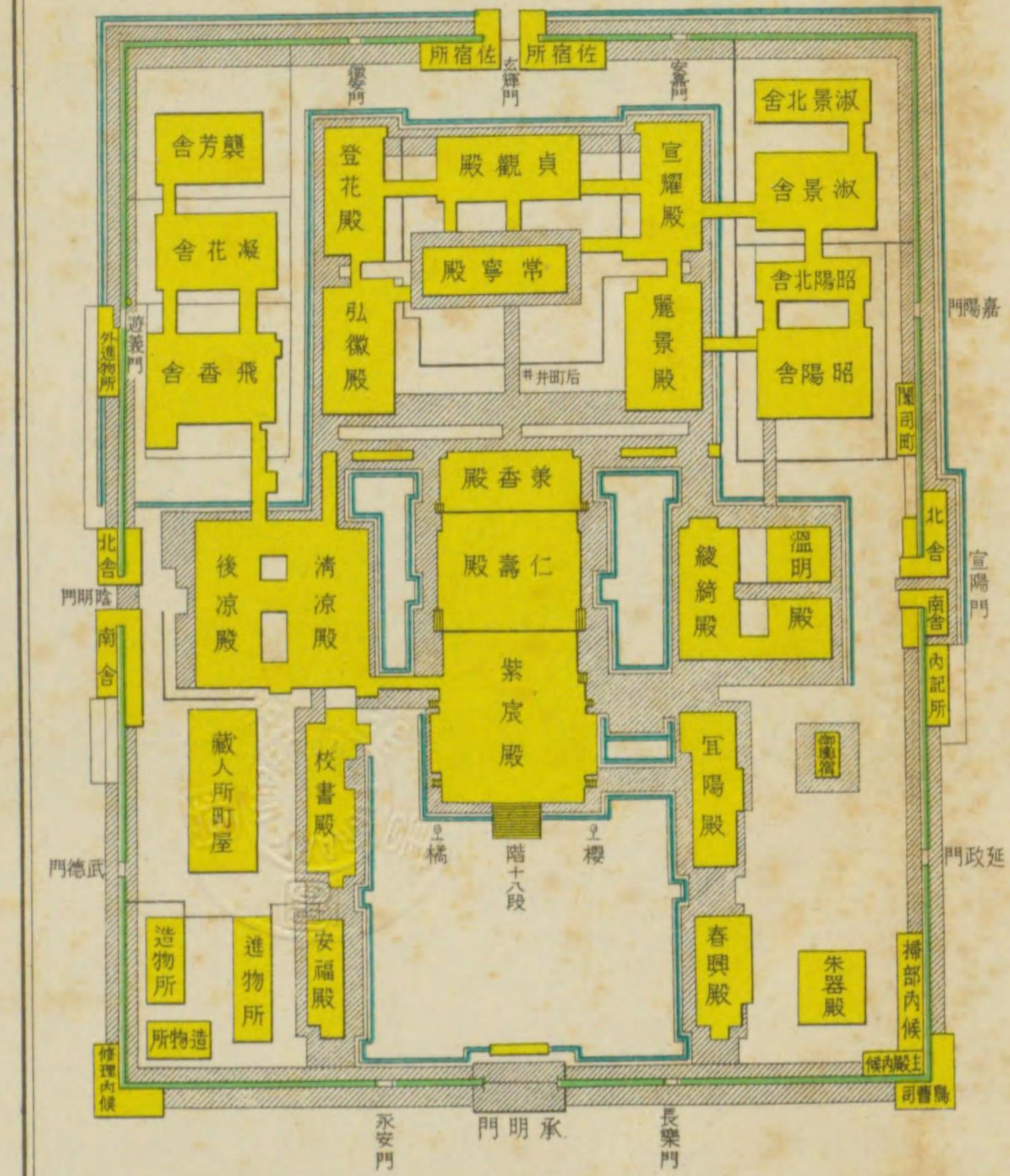
5  
3



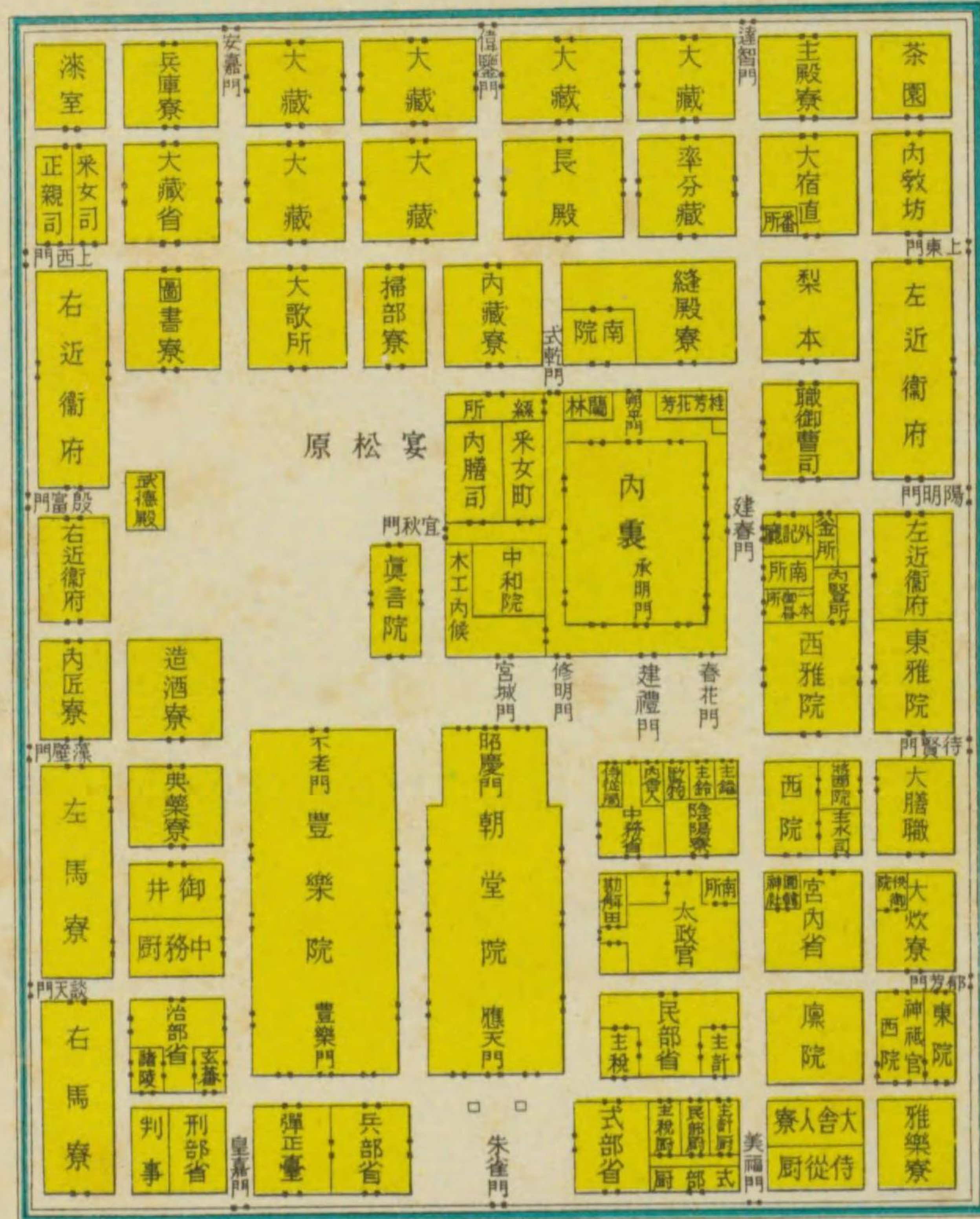


大內裏及內裏圖

內裏之圖



大內裏之圖





53



5  
3

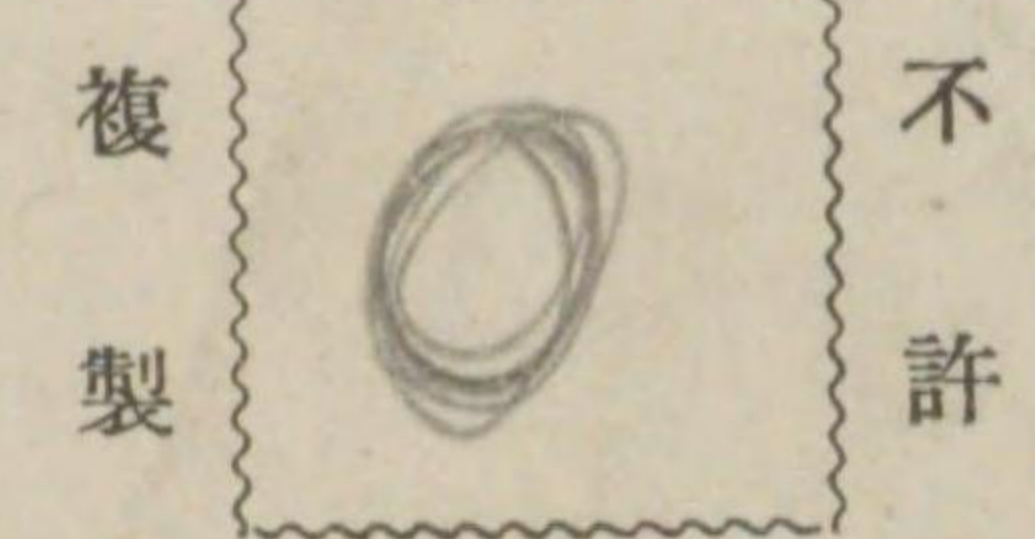
595  
3941



昭和六年九月五日發行  
昭和六年九月五日印刷

卷卷卷  
下中上  
各金貳圓五拾錢也

日本外史解義



發行所

株式會社  
弘道館  
東京市神田區北神保町十一番地

電話九段一三六八・一三六九番  
振替口座東京八一五番

著作者

賴成一

發行者

株式會社  
弘道館  
東京市神田區北神保町十一番地

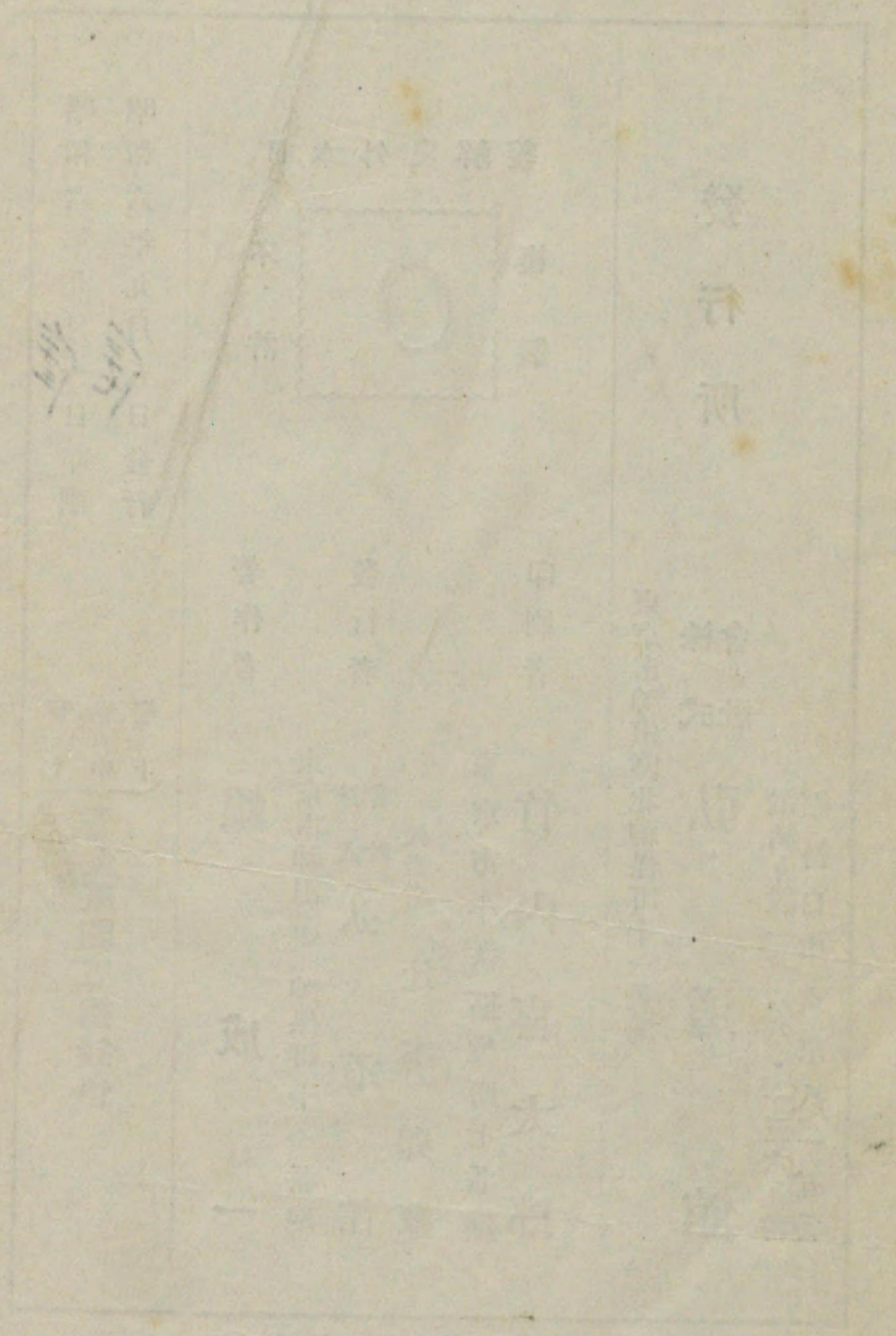
印刷者

代表者  
辻本卯藏  
東京市牛込區榎町七番地  
竹內喜太郎



5  
3

地  
圖  
卷  
之  
一



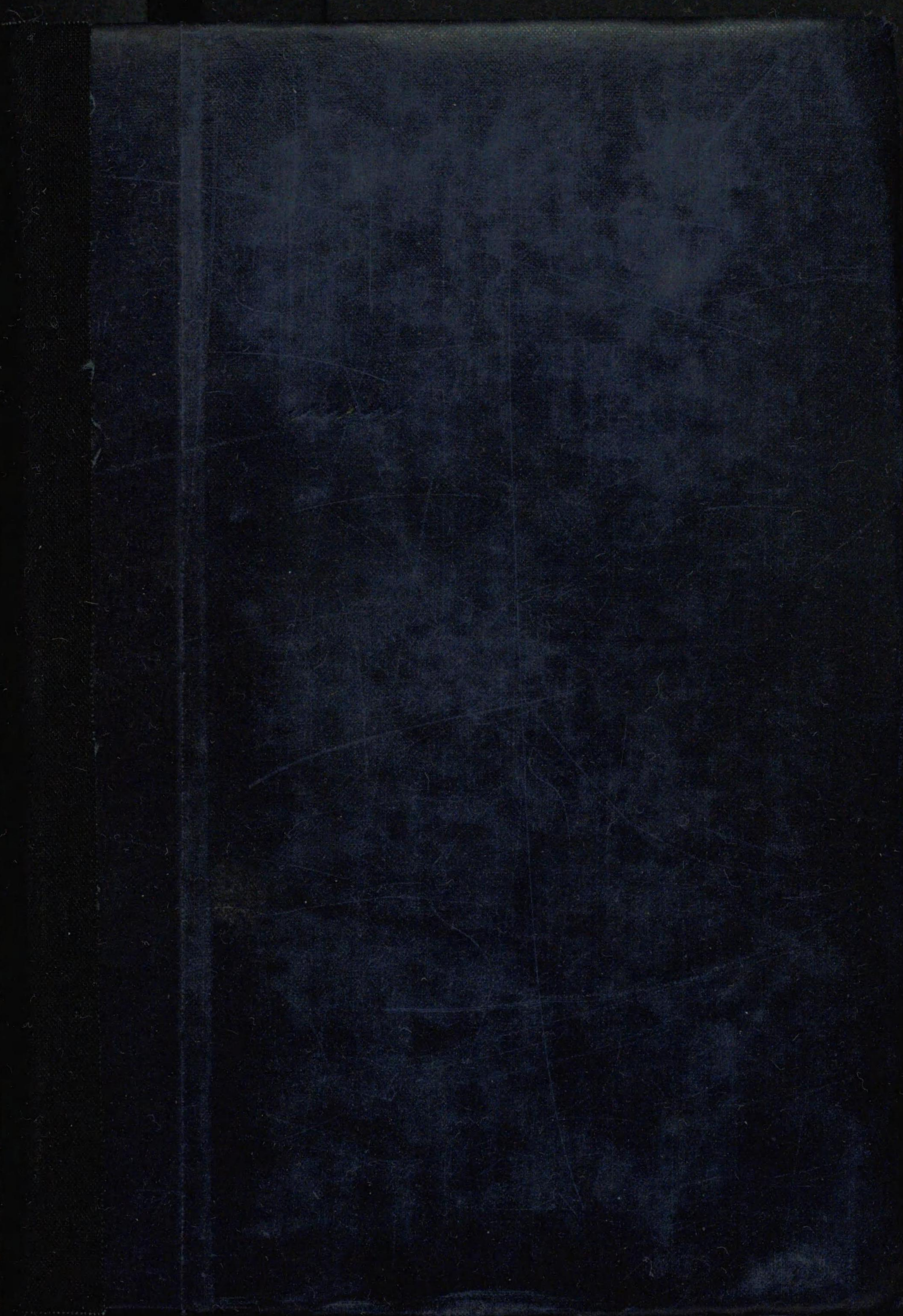
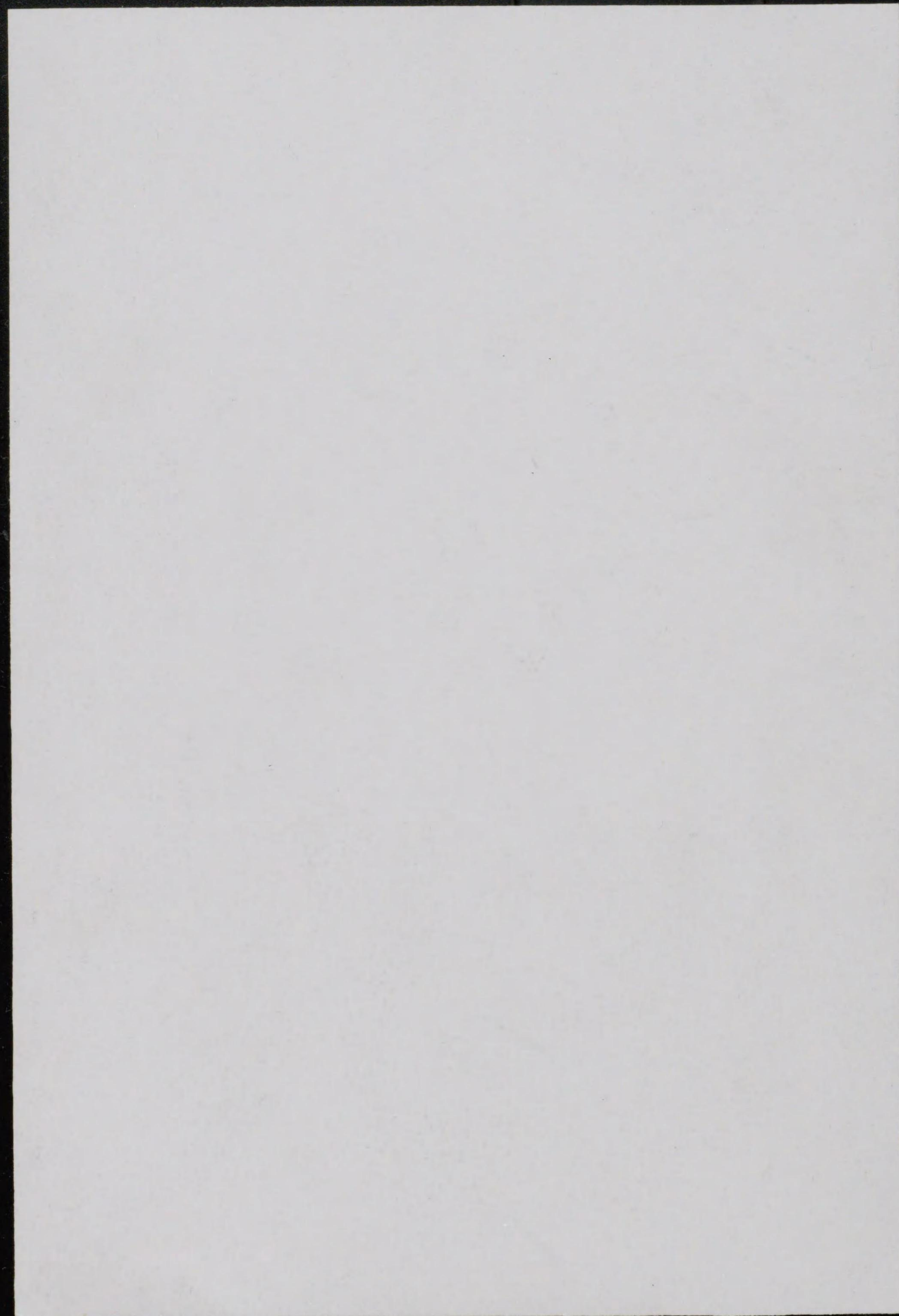


53



595  
394





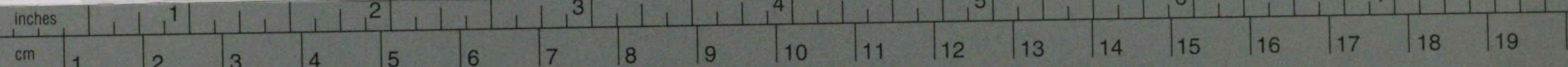
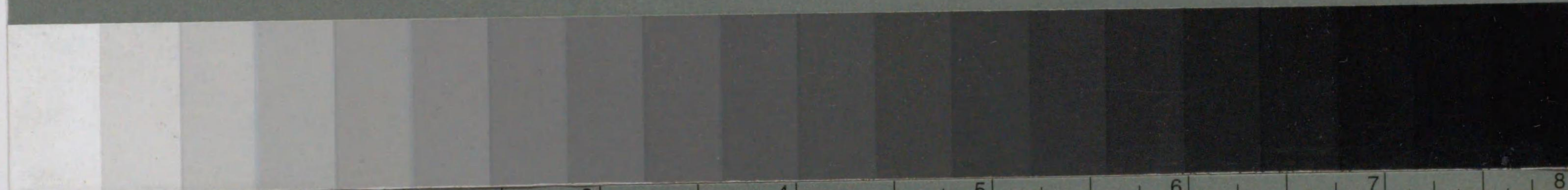


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

